

# 幼児のプレイセラピーと教育

——プレイセラピーは教育と無関係なものか？——



堀 越 清

プレイセラピーに従事または関心を持つ程の人ですと、それと教育との関連について頭に浮かべる問題がいろいろとあるようです。

私たちがセラピーを扱う場合、たとえそれがどんな立場や方法をとっているにせよ、その心の底に「治す」とか「人格上の変化を期待する」といった意識があることは否定出来ませんし、むしろそれがあ  
るからこそその為に自ら最善なりと信ずる立場、方法、態度にもと  
づいてセラピーをおこなっているわけなのですが、他方セラピーを  
受けて教育的環境に復帰して、うまく、やっている子どもたちを見  
ると、間接的かもしれないが自分のやっていることが教育的なもの  
につながっていることを何となく感ずるし、またその程度の感じだ  
けに止めたくない気持も起こってきます。ですが実践的教育に直接  
タッチしていないのでプレイセラピーと教育とのつながりをもとす

れば頭の中だけで捉えてしまいがちで、観念的抽象論の水準からな  
かなか脱け出すことが出来ません。しかし教育実践そのものになら  
ざわってしかもプレイセラピー（カウンセリングも含む）も担当さ  
れている人々——ことに最近では幾つかの幼稚園では保育場面から  
とかく外れる子どもの為に（それを問題児と呼ぶ人もあります）園  
の先生によって何らかのプレイセラピーが為され、或る程度の効果  
（保育にのるようになる）をあげておられるようですが——そうし  
た一方で保育を、他方でプレイセラピーをおこなう人々にとつて  
は、プレイセラピーと教育との関連ということもっと現実的に重  
要な問題になってくると思えます。

昨春秋、江戸川区立松江幼稚園で催された研究発表をおきしま  
した時、この問題はかなりはつきりした形で現われてきました。こ

の園にはブレイセラピーの為の一室がありますが、そこを経た子どもがもとのクラスに戻って以後の様子について幾つか発表されましたが、討論の時ある参会者が、それ程保育上効果的なものなら、ブレイセラピーのやり方を何とか日常保育の面にとり入れることは出来ないものか、そうだったら何もわざわざブレイセラピーだけ別個におこなうこともないではないか、それが出来ないのは何故か、という質問を發しました。恐らくこの人としては、ブレイセラピーが保育効果をあげる為の補助手段にすぎないと考えているわけでは必ずしもないし、もっと意味のあるものと考えてはいる、しかし現実には保育の面にプラスしていることはたしかなのだから何とかとり入れてみたい、出来れば二重の手間みたいな事は避けたい、それはどうしたらよいか、という気持ちで出されたのだと思います。即ち疑問とか批判というよりは、よりよき効果的な保育をつかみたいという現場の切実な要求といった形で提出されたように感じられますが、ここに現在の当面する問題が含まれていると思しますので、その他の問題は別の機会にゆずってこの質問を足がかりにして実践的立場におけるブレイセラピーと教育（したがって教育実践）との関係を考えてみましょう。

さて、この質問には二つの大きな問題点があげられると思います。即ち一つはブレイセラピーの教育実践への適用の可能性」という点であり、他のひとつはブレイセラピーと教育実践とは互い

に統合されるべきものか、または別個のものか」という点です。

先ず第一の問題点についてですが、ここで注意しなければならぬのは、単にブレイセラピーといっても決して一種類のものだけではないことで、ロジャーズ、アクスラインの提唱する来談者中心的（クライエント・センクード）な立場に基づくブレイセラピーがあるかと思えば、それとは異なるスラブソンその他の分析的な立場に基づくブレイセラピーもあり、その他にもあるものと思われま

す。いずれにおいてもその治療目的には人格の変換とか再構成ということが目指されています。ところで立場がちがえばその治療目的も異なるものと考えられますし、私たちがこの第一の問題点即ちブレイセラピーの教育実践への適用ということをもくろむ場合、果してブレイセラピーの治療目的と実践における教育目的とは同じようなものか、それこそ不健康な時のみならず健康な時にもきく薬みたいなものか、或いはちがうものか即ち不健康にはきいても健康な人には全く役立たないか、むしろ害にすらなるような薬の如きものか、ということを慎重に考える必要があると思えます。そこで限られた紙面ですし、いろいろの立場の持つ治療目的と教育目的とをいちいち比べることも出来ないのので、私は話をすすめやすくする意味で、最近話題になってくる来談者中心的立場の治療目的と教育目的とを比較してこの問題点即ち双方の結びつきというものを考えていきたいと思えます。さてご存知のように来談者中心的立場では、人間は成長

と現実への適応を目指して自己を表現しようとする力と目的を持つ、ところがそうした目的を充たす為には受容的な人間関係を必要とする。プレイセラピーはそのような受容的な人間関係を作って来談者(子ども)の目的達成を助けることが治療目的である、とされています。他方、教育目的というのを見ますと、やはりそこにはさまざまな人間の理想を念頭にいろいろな異なった教育目的もあるものと思われませんが、その中で、生活指導の目的というところを見ますと、どうもプレイセラピーでの来談者中心の立場と何か関連がありそうです。そこで生活指導の専門家、宮坂氏の著書<sup>\*</sup>を調べますと、「生活指導とは一人ひとりの子どもの現実在即してかれらが人間らしい生き方をいとなむことが出来るように教師が子どもたちと親密な人間関係を結ぶことによって援助する事である」という意味が書かれてありますし、少なくともこれによればことばの上では来談者中心の立場の治療目的と似ておりますし余り矛盾も感じられません。この両者においてこのようにことば上の目的でたいしたちがいを感じないとすれば、ことばだけをこれ以上つぎ廻すよりは、現実ではどうなっているかをしらべることが必要になってきます。したがって実際面でプレイセラピーの教育への適用を困難にするものがあるとすればそれは何か、ということになります。こうなりますと、机上で論じても問題はいつこうに展開しないのでここは実際にその仕事にたずさわっておられる人の経験というものを参考にした

と思います。前にのべた松江幼稚園ではプレイセラピーを扱う場合に来談者中心の立場をとっており、更に保育——保育は生活指導的なものと考えられます——をプレイセラピーと共に担当されている浅羽睦子さんがおられますのでこの方のお話を伺いますと、「プレイセラピーで子どもに接する態度を保育場面でどの位保てるかということに或る程度の困難を感じる」ということでした。ここでこの態度とは来談者中心の立場で言われている受容的態度を意味するものと思われませんが、さらにその受容的態度とは、子どものあるがままの感情をセラピストが暖かい何ら評価的なものを含まないで受け入れ、相手の気持を理解しようとする態度(子どもからみれば、この人は私の気持を分ってくれそうだと感じるようなセラピストの態度)をさすものであり、一見容易に見えてその実たいへんむずかしい仕事なのです。浅羽さんの言われた事はこうしたセラピーでの受容的な態度と思われるものを保育の時に保つ事はむずかしい、セラピーでは子どもの数はひとりから二、三人まで、時間も一時間以内(大体五〇分)である、それに対し保育時には二〇人以上(遙かに多いでしょうが)の子どもたちを一時間以上も相手にしなければならぬ。そうした場合、受容的態度で一人ひとりの子どもの気持を受止めようとしても受止めきれないでこぼれてしまう子どもも出てくる、それをこぼさないようにするには保育者のどうしても別の面

<sup>\*</sup>宮坂哲文「生活指導と道德教育」二三頁(明治図書一九五九年二月)

が出てしまう、ということだろうと思います。この例に示されたように、プレイセラピーでの受容的態度を保育(教育)場面での程度保てるか、ということが第一の問題点を解く一つの鍵のように感じられます。こうした行き方こそ教育場面への適用の一つの試みだとしてもよいのではないのでしょうか。(浅羽さんご自身としてはそこまでは言いたくはないのですが)そうなると、こうした行き方で手を阻むものは何か、——今のところそれについてははっきりしたものが現われてきませんが、何か、現在この道を歩む人間としての限界の如きものを感じますし、恐らく当事者の実践や経験そのものが、その限界を広げて解決へと進まれるものと期待されます。そうなりますと同じクラスの子どもにその保育の担当者がセラピストとしてのぞむことの困難(上にのべたのはちがうクラスの子どもにセラピーを行なった場合です。)もその意味が分ってくるでしょうし、すべては関係者の実践の仕方にかけられるわけです。

次に第二の問題点についてですが、現実にも前述の如く実践面で適用の問題に関してさえ既にいろいろの難関が横たわっている現状を考えますと、ことばの上だけでプレイセラピーと教育との融合とか統合を論じてしまうおそれがありますし、またそれでは役に立つものもあまり無い、ましてセラピーと教育とは別個なものかどうかについては今のところ何にも言えないのではないかと思えます。単に融合だの統合だのを目的とする余り、手段としての現実の努力を

怠るか誤ってしまったては本末でんどうになってしまいます。ですから、この問題点はそのままの形で今後に残すより他はないのではありません。

以上は来談者中心の立場でのプレイセラピーと生活指導的な教育との結びつきに関し、目的の上から見た場合と実践的な立場から見た場合とについて私なりに感じたままを述べたのですが、最近はい集団遊戯療法の試みもしきりにおこなわれるようになってきましたし、この方面での関係者とか、他の立場のプレイセラピーと教育の問題を考えておられる方々のご意見がごありでしたら大いに承わりたいと思います。

いずれにせよこの問題は教育や保育の面に新らしい何ものかを吹込んでいようですし、この分野で活動されるかたがたがどんな行き方で未来を打開されていくかということが期待されてなりません。今後こうした問題について何かございましたら何卒お教え頂ければと思っています。

(東邦音楽大学講師・東大教育相談室)

補訂 6月号62—64頁「洋書紹介」

は 網谷夏海 の執筆です。